

3 講演の要旨

「仕事としての絵本創り」

絵本作家 とよたかずひこ 氏

(1) はじめに

とよたかずひこです。このようなタイトルでお話するのは、初めてです。今日いらっしゃる方は、子どもたちに読み聞かせをしてくださっている方々と伺っています。仕事として絵本創りを続けるには、自分の子どもに読み聞かせをするのとは違う要素も必要になります。今日はその話も交えながら、私がいつもやっている「子どもたちを前にしてどのようにしてお話を進めているか。」を、実演を通してお話していきたいと思います。



(2) 絵本創りのきっかけ

最初に、紙芝居から紹介します。

絵本の場合は、文・絵とか作・絵という言い方をして創った人のことを表します。紙芝居の場合は脚本といいます。紙芝居は、舞台や映画と同じように誰かが表現して初めて相手に伝わるというツールです。本は黙読もできますから、文・絵と言いますが、紙芝居は演じるということ、これは不特定多数の人間に同時にみてもらうということです。紙芝居の場合は脚本という言い方をするので。

— 脚本・絵 とよたかずひこ 『ごろごろごろん』 — （紙芝居を読む）



私には娘が2人います。長女が幼稚園に行き始めた頃、寝起きが悪く、なかなか起きないものですから、ある日、父親である私が、かけ布団をはがして敷き布団ごと転がしたのです。すると、「ごろごろごろん」と転がっていきました。当然目を覚まします。すると、娘が私に「もう1回。」と言ってまた布団の上に寝そべってきたのです。「あれあれあれ」と思い、また転がしてやると「ごろごろ」と転がっていき、一緒に転がっていった枕

を抱えてもう1度布団の上に寝そべってきたのです。これは、2004年の作品ですから、もうすでに自分の娘は読者対象ではなくなっていました。でも、「ああ、子どもってこういうことを喜ぶんだ。」ということ、思い出して創ったのがこの作品なのです。きっかけは「我が子に創る。」ということだったのですが、自分の娘が読者対象の時は、なかなか作品はできませんでした。読者対象が自分の子どもであり、なおかつその作品が他の子どもも共感を覚えてくれれば、作品の力としてあったと言うことができます。我が子だけに向けて創るのであれば手作り絵本でいいのです。子どもは、すごく喜ぶ。でも、仕事として成り立たせるためには、そう簡単にはいきません。我が子が喜んだから、その作品を出版社に持ち込んで、これがものになるかといえば、とんでもないことです。子どもは親に対して気遣いがありますから、「お父さんそれ素敵。」とか「おもしろい。」と言ってくれたのを真に受けて、それを出版社に持ち込むということは今更ながら「恥ずかしいこ

とだったんだ。」と思います。今、考えただけでも冷や汗ものです。「よくこんな作品で持ち込みをしたな。」と思います。今だから分かるのですが、やはり「作品の力」というのがあるのです。それはいったい何なのでしょう。それは、テクニック云々ではないのです。それが分かれば、いいのですが、言葉では言い表すことのできないそのハードルがすごく高いのです。見ず知らずの方に手に取ってもらえる作品というのは、絶対あります。でも、創り手の作品世界というものがちゃんと出ていないと、やっぱり伝わらないのです。

私自身、それまで親から読み聞かせをしてもらった経験がなく、なおかつ幼稚園に行かず、いきなり小学校が集団生活でした。1回も読み聞かせというのを経験しないで大人になりました。それで、絵本というものは幼稚なものだ、稚拙なものだということが念頭にあり、まともに絵本を見たことはありませんでした。娘が幼稚園に行き始めて、月刊の絵本雑誌を幼稚園からもらってくるようになりました。その時、その月刊誌を持ってきて、寝る時に「お父さんこれ読み聞かせをして。」と言われたのです。それが、絵本との初めての出会いでした。また、私の娘が持ってきたのが、定番と言われる『ぐりとぐら』とか、かこさとしさんの一連の『てんぐちゃん』の本でした。でも、その時どう見ても、上手い絵に見えなかったのです。「この程度のお話で、この程度の絵でやれるのなら、私でもかける。」という思いが私の絵本創りの出発点なのです。しかし、それがそうでなかったということを思い知らされました。出版社に持ち込んだら、ボツ、ボツ、ボツ……。「何なのだろう…。」と自分なりに悩みました。しかし今言えることは、「作品の力がないとダメ。」だということです。今でもですが、このことを思い知らされるのです。でも私の出発点は、「あの程度の絵だったら描ける。」ということです。娘が『ぐりとぐら』を持ってきて読み聞かせをしていると、私自身があまり作品の世界に入っていけないものですから、読み手の方にあくびが出てきてしまった頃にカステラが出てきたのです。すると、隣で娘が、カステラに手を伸ばしたんです。それで、口に持って行って、「何しているんだ？」と思ったら、食べるんです。食べるマネをしていたんです。それが、子どもが入り込むというか、子どもの存在ということを初めて意識したのです。「これはただものではない。」「子どもを引きつける作品っていうのは、一体何なんだろう。」と思い悩み、それは今も続いています。

『でんしゃがくるよ』の作品も子どもとの距離ができてからできました。間近で長女に向かってかいているときは空回りしていました。私の作品にライオンさんシリーズがあるのですが、この作品はまさにその渦中に作ったものです。でも今は市販されていません。淘汰されてしまうのです。そう考えると、やっぱり読者というのはすごいものなんだなって思います。子どもを含めて、それを読み聞かせる大人の目利きはするどいものだなと、毎日思い知らされております。今でも、編集者とのやりとりで、ボツになることがあります。「とよたさん、今でもボツになることあるのですか。」と聞かれることがありますが、実際あるんです。あくまでも子どもに向けて作っていますから、子どもの反応というのは常に考えますし、読み聞かせをする大人、創っているのも大人ですけど、やはり常に子どもと読み手である両方を意識するわけです。二重構造のようにですね。乳幼児は自分で手にしませんから、大人が存在して初めて真の読者に届くわけです。ということは、大人の目利きと言うことが、とても大事で、「わたしこの作家嫌い。」「この絵嫌い。」という時点で、真の読者に届かないという宿命をもっているわけです。乳幼児は生まれて生きている時間が長くない訳ですから、まだ好き嫌いのレベルはなく、キャパがものすごく広いのです。多分みなさんも実践されて、経験されていると思いますが、「これ嫌い。」とか「これ嫌。」とか言わないで、どんな絵でもちゃんとみますよね。「怖い。」とかはあると思うのですが、大人ほど好き嫌いはありません。と

りあえず見てもらうということ、そこに伝えるために、我々は創っているのです。そこには、編集者もいます。「なんでこの作品がわからないんだ。」と作家の思いとしてはあるのですが、初見で、なんかここがおかしいというふうにその編集者が気付いたら、その背後には相当の人数、同じような疑問を持つ方がいらっしゃるんだろう、と瞬時に私は考え、もう1回持って帰って自分の中で宿題にするのです。それをごちゃごちゃといじるよりも、とりあえず時間をおいて1回持ち帰ってみるのです。そして、もう1回聞いてみても意見があったときは「なんで？」と思っても、「こういうふう考えたのか。」と1回整理して、時間をおいてもう1回考え直してみます。すると、やっぱり疑問点が当たっていたりするんです。これは最初は腹が立ちます。すんなり通れば1番いいのですが、非常に勉強になることでもあるので、今でも、そういう疑問があった場合は、1回考えてみます。読者あつての作品創りだと私は思っています。「仕事としての絵本創り」というのはそういう意味合いも含めて、お話をさせていただいているのですが、そこに全部つながってくるのです。私の場合は「誰に向けて描いているか。」ということをはっきり見据えて、作品創りをしております。これは、子育ての時の思い出して創った作品です。もう1つちょうどその時代作った作品があります。

－ 「脚本・絵 とよたかずひこ 『でんしゃがくるよ』 」－ （紙芝居を読む）

（途中まで読む。）

このト書きに、(間)と書いてあるんですね。

リアリティを出すためには、例えば指宿・枕崎線の次の電車は1時間に1本というふうに言うんですね。すると、子どもたちは、「そんなに待ってられない。」とそわそわし始めます。上りが来たら下りにいきたいところなのですが、紙芝居の宿命で、これは一方的にしか行けません。そんなふうに間を取って、頃合いを見計らって

（続きを読む）

(3) どのようにして絵本が創られるか

ア 『でんしゃにのって』

娘2人、子育てしているとき、私は東京都の東久留米市というところに住んでいました。最寄りの駅は、花小金井という駅でした。花小金井と小平の駅の間、車の通らない小さな踏切がありまして、長女を自転車の後ろ、次女を前のかごにのせて、3人でよく電車を見に行っていました。花小金井と小平のちょうど中間にある踏切でしたから、日常普通車掌さんは外を見ていないんです。しかし、安全確認をする必要が無いからか、たまたま車掌さんが私たちを見ていてくれたんですね。わざわざ窓をおろして、私たちに手を振りかえしてくれたんです。それがとっても嬉しくて、この紙芝居の話に結びついたので。しかしこの間娘たちがきたのでその話をすると、本人たちは何にも覚えていないというのです。ひたすら父親だけが楽しい思い出だったんだなって、つくづく思いました。この『でんしゃがくるよ』のあとに、『でんしゃにのって』という絵本を読み聞かせしてみたいと思います。

－『でんしゃにのって』 とよたかずひこ ー （読み聞かせをする）

これを作るきっかけを絵を描いて説明をします。

私は、宮城県の仙台市出身です。昨日は、新幹線「さくら」に乗ってきました。アナウンスで「次は川内」と聞こえてくると、異様な感じがします。降りなきゃいけないかと思います。アクセントも全く同じなんですよね。私は、東北仙台で生まれ育ちまして、高校卒業までそこにいました。

(地図やおじさんの絵等を描きながら説明)

青森があります。青森と仙台の間、当時、東北本線で11時間かかっていた。11時間かかるということで・・・こういうおじさんがいまして(絵を描きながら)・・・何ですか？そうです。弁当売りのおじさんです。「弁当、弁当。」ってプラットフォームまで弁当売りのおじさんが出てきてくれ、お客さんは、いちいち車を降りなくても、窓を降ろして、この停車時間の間にお金を渡して、お弁当を買えたわけです。これが日常的な光景であったのです。当然、弁当売りのおじさんは、1人じゃありません。競争相手がいます。「弁当、弁当。」って、みんな声を張り上げるのです。プラットフォーム上で。すると、乗っているお客さんは駅が近づいてくると、外側から「弁当、弁当。」って声が聞こえてくるんです。

この『でんしゃにのって』のヒントになった話に戻ります。ある旅行者、旅人が仙台で汽車に乗りました。途中で、お腹がすいてきたんです。駅が近づいて「弁当ー、弁当ー。」という声が聞こえて、「さあ、弁当を買おうかな。」と思うと、車内放送が次の駅名を告げるわけです。外から「弁当ー、弁当ー。」、中から「うまくなー、うまくなー。」と聞こえてきます。「弁当ー。」「うまくなー。」「弁当ー。」「うまくなー。」と聞こえてくるので、弁当が売れなかった駅があるのです。東北本線の岩手県に沼宮内(ぬまくない)という駅があります。これがなまりますと「うまくなー、うまくなー。」って聞こえてしまうので、沼宮内の駅弁当が売れなかったんです。

もう少し南下して、また駅が近づいてきました。「弁当ー、弁当ー。」という声が聞こえてきたので、さあ、お弁当を買おうとすると、車内放送で「かねがさきー、かねがさきー。」と聞こえてきます。「弁当ー。」「金が先ー。」「弁当ー。」「金が先ー。」「弁当を買う前に金が先か。」と、評判が悪くて、売れなかった駅が「金ヶ崎駅」。この駅弁当も売れなかったそうです。

宮城県に入ってきます。また駅が近づいて、「弁当ー、弁当ー。」という声が聞こえてきます。お弁当を買おうとすると、車内放送が「もすこしー、もすこしー。」って言うんで、「ああ、もう少し我慢するんだな。」と言って、売れなかった駅が石越駅(いしこしえき)、この駅弁当も売れなかったそうです。

もう少し我慢すると、また駅が近づいてきて、「弁当ー、弁当ー。」という声が聞こえてくると、車内放送が「ここだー、ここだー。」と言うのです。「弁当ー。」「ここだー。」「弁当ー。」「ここだー。」って言うので、「ああ、ここで弁当を買うんだな。」ということで、弁当がたくさん売れた駅が小牛田駅(こごだえき)。今もちろんあります、東北本線に。私は、両親と姉二人、父方の祖父母、叔父、叔母と一緒に暮らしておりまして10人家族だったんです。この小牛田の駅の駅弁当がたくさん売れたという話を家族の中で一番小さい私に向かって、おばあちゃんがしてくれていたんです。

これは、私がちょうど50歳の時の作品です。それまで、絵本を作ってもがいていて、出版されても他のみなさんにあまり手に取ってもらえるような作品になっていなかった時期がありました。そんな時、このおばあちゃんの話が今から15年前のちょうど50歳の時、ふっと思い出されて、あっという間に作品としてできあがったのです。このお話はずっと最後まで見通せて、ダミーというもの(実物を見せながら)が15分ほどでできたのです。ダミーは、編集者といろいろ

打合せをするたたき台にもするものですから、どの作家さんも必ず作ります。本はページをめくらせることが大事なことになるので、必ず最初は、このような形で作ります。ただ、これがものになるかどうかは全く別です。私は、こういうおばあちゃんの話をちょっと書き留めておきたい、という気持ちから創りました。だからすぐには、持ち込みをしませんでした。これを絵本にしようという野心が、あまり無かったんです。なんか、書き留めておこう、というくらいだったのです。「くまだ、くまだ。」って熊が乗ってきて、「ぞうだ、ぞうだ。」って象が乗ってきて、当たり前といったら当たり前なんです。ただ、こういうベースがあって、書き留めておこうというだけでした。私の仕事場に別件で訪ねて来てくれた編集者が、たまたま床にこういう形で置いてあったのを拾いあげて、パラパラパラパラ眺めていたかと思ったら、「この作品おもしろい。」と言ってくれたんです。作った本人は、意図して「おもしろい」ものを創ろうと思っていたわけではないのです。でも担当者が「おもしろい。」と言ってくれ、「これを預らせてください。」と言って、会社を持って帰りました。そこは、アリス館という小さな出版社で、編集長と編集者の2人でやっていたのです。もちろん、営業担当はいましたが。でも編集ということでは、2人でやっているから、結論が早いんです。次の日編集長から電話があり、「うちから出版させてほしい。」ということで、この作品は日の目を見たのです。

今思うと、それまでの私は、例えば「ぞうだ、ぞうだ。」と次のページを象だと思わせておいて、カバが出てくる、というようなやり方で創っていたのです。ところがこの『でんしゃにのって』は、当たり前すぎて、自分としては物足りないような感じでした。でもこの作品が、担当者の目に止まり、出版してもらったことによって、じわじわじ広がっていったのです。

子どもの本というのは、「爆発的に、一瞬で売れなくてもいい。」と思っています。子どもの本には、定番というものがあります。それは長く、長く読み継がれているということです。当然みなさんご存知の奥付を見ると、初版から何年経って何刷なのかというのが、参考になります。だから一度に何十万も売れることはなくても、細々と長く続く作品である方が、子どもの本に携わった人間としては、とても有り難いのです。まさに『でんしゃにのって』が、その形になりました。どこで読み継がれたかと言いますと、保育園の現場だったのです。保育園の先生というのは、やっぱり現場の子どもたちに常に会っているから、子どもの気持ちというか、子どもの生き方っていうのをよく捉えていると思うのです。その先生方が読んでくださったからこそ、版元の方から「子どもが喜んでくれた。」と知らされたのです。この作品を通して「ああ、こういう作り方があるんだな。」というのを学んだ作品でもあるのです。私としては、「あのとき別件で、あの編集者が来てくれなかったら、いったいどうなっていたんだろうか。」と自分で思うほどです。いい出会いがあって、とりあげてもらったから、今日まで続いているのです。

その後、同じ編集者と『ボートにのって』『さんりんしゃにのって』という三部作を終えて、「15年ぶりにうらちちゃんが帰ってきた。」というキャッチフレーズで、今日初めてみなさんにご披露するのが、『ばしゃにのって』です。干し草の中から「ピンポン。」となって、いろんなものが降りてくる、という形のダミーを提起しました。これがOKという形になり、これが今どういう段階に来ているかというと、色校正という段階です。これが初稿になります。今度私はこれに朱を入れて、再稿をとることになります。今このような段階で、『ばしゃにのって』は進んでいます。あと、私の中のアイディアには、次、どういうもので、例えば現実的にみなさん乗ったことのない昔の乗り物とか、そういうもので創っていったらいいなと考えています。

私の仕事は、自分で自分をプロデュースしなければなりません。今、少子化になっていて、

赤ちゃんがものすごく大事にされています。0歳児から読み聞かせをする、読み聞かせをした方がいいということで、需要が多いのです。出版社も赤ちゃんファーストブックということで赤ちゃん絵本を作っています。昔を思うと考えられない幸せなことです、いろんな出版社から「絵本を創ってもらえませんか。」という依頼を受けます。でも、それ全部に応じていたら、自分自身、訳が分からなくなり、どこの出版社からも似たようなものを出してしまいそうになりそうなのです。もちろん、それに応じきれる作家さんもいます。多作でどんどんどんどんやられます。これは「自分で自分をプロデュースしなければいけない。」というのにかかってくるのですが、人間がつくっているのですから、全てに応じていると、どの出版社から出しても、似たようなものになってしまいます。

イ 『バルボンさん』シリーズ

— 『バルボンさんのお出かけ』 — （読み聞かせをする）

これは、『でんしゃにのって』を創った同じ編集者と創った作品です。「次、何を創ろうかな。」とその編集者と雑談をした時に、バルボンという名前を出したのです。私たちが小さい時、プロ野球阪急ブレーブスに、バルボン選手がいたんですよ。その時、別に野球の話をしたわけではないのです。では、どうしてバルボンの名前が出てきたか、その前後すら定かではないのですが、「バルボンって名前、とてもいい、かわいい、その音感がとてもいいので、バルボンを主人公にして、お話を創りませんか。」と言ってきたのが、この作品を創るきっかけでした。まさか野球の話にするわけにはいきません。「バルボンという名前で、動物に置き換えてみたら何がいいかな。」と思ったのです。このバルボン選手というのはキューバ出身の選手で、笑うと白い歯がニュートと出ているのが印象的でした。だから「これはワニしかないな。」と思い、ワニのバルボンでお話を創り出したのです。動物園に行くと、動物園生まれの動物園育ちですが、みなさんご存知のとおり野生動物が、どうみても不自然な状態でいるわけです。でも、それを今更、我が身を嘆いてもしょうがないので、これは割り切って、仕事として動物園の檻の中にいてもらうことにしたのです。だから動物園が閉園すれば、それぞれ動物たちも家族があるので家に帰ります。このような発想から、『バルボンさんのお出かけ』を創ったのです。アリス館という小さい出版社にしては、この作品は売れたのです。売れると、続編をとということになります。続きを創るとなると、バルボンさんのキャラクターを構築させなければなりません。物語に出てこなくても、「どういう所に住んでいて、日常どういう生活をしているんだ。」ということを設定図みたいに描き出してから、2巻目、3巻目を創らなければ、と思いました。そこで何の根拠もなかったのですが、このバルボンさんは「年の頃33歳で、独身、血液型がO型、勤務先は動物園。」そして、本の作りで扉のページというのですが、扉のページに何気なく家を描いたので、「マイホーム有り。」という設定にしました。ここまで決まると、今度は無理矢理お話を創ります。「そのバルボンさんのお家の中はいったいどうなってるのだ。」ということで、『バルボンさんのおうち』という作品を次は創りました。バルボンさんの働いている動物園は図書館と同じで月曜日がお休みなんです。で、月曜日お休みの日にのんびりお昼寝していると、動物園で働いている同僚が遊びに来るのです。

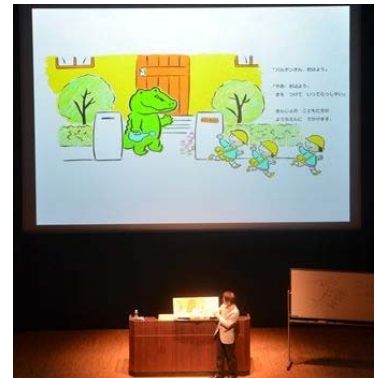
（絵本を見ながら説明）

かばさん、フラミンゴさん、ゴリラさん、バクさんが遊びに来ます。バルボンさんの家の前は、

このようになっていて、季節は冬です。すると子どもたちが幼稚園から帰ってきます。この子どもたちは、浮き袋を持ってバルボンさんの家に遊びに来ます。実はバルボンさんの家はジャングルでした。子どもたちも一緒に、遊んで、今日は楽しかったね、というお話です。

バルボンさんは、33歳独身です。「どこかで彼女と出会うそう、出会うそう。」と、もがいたんです。ワニ同士が道路上で出会うことはありません。そうかといって、わざわざペアリングというのも、しっくりきません。「彼女と出合わせよう、出合わせよう。」とばかり考えていると、行き詰まってしまうので、発想を変えてみたのです。「動物園で仕事をしているバルボンさんは、いったいどういう仕事をしているんだ。」と、発想を切り変えたら、ぱっと切り開けたのです。

仕事をやっていますから1回目と同じようにバスで通勤してきます。カンガルーさんは、動物園の近所に住んでいるので、歩いてやってきます。お腹の袋の中には、赤ちゃんがいます。シロクマさんは、背中に赤ちゃんをおんぶして自転車ですべてきます。ゴリラさんは、ヘルメットをかぶった子どもを乗せて、バイクに乗ってきます。象さんは後ろに子どもを乗せて、マイカーですべてきます。この動物園は、お父さん、お母さんが共働きをしていて、子連れで仕事場に来て、バルボンさんだけが独身という設定ができるのです。さあ、動物園が開きました。それぞれがプロとして仕事をしています。お客さんが集まったところで、カンガルーさんはジャンプ、しろくまさんは水に飛び込み、ゴリラさんはブランコに乗ります。象さんは水浴びをし、バルボンさんは大きな口を見せてあげます。閉園時間になると、最後のお客さんが帰っていきます。カバさん夫婦やきりんさんが、「1日労働お疲れ様。」とねぎらいます。親が働いている間、子どもは檻の中で働く必要はないのです。親が働いている間、子どもたちはどうしているのでしょうか。お父さんお母さんは、勤務が終わると檻の外に出てきました。そして、みんな森の奥に入っていきます。すると、森の奥には小さな保育園があります。「また明日、また明日。」手を振っているのは、ワニのサクラ先生です。サクラ先生のお仕事も終わりました。バルボンさんとサクラさん、今日はこれからデートです。



ここまでくると、今度は結婚です。ダミーでは、結婚式を描いたのですが、どうもしっくりこなかったのです。「バルボンさんの家はジャングルですから、結婚式パーティーはバルボンさんのお家で、仲人は動物園の園長さんご夫妻。」そこまで出来上がって、「サクラさんは一体これまでどういう人生を歩んできたんだ。」ということを描かないといけなくなったのです。結婚式前夜から描かなくてはならなくなったので、話が非常に長くなったのです。「これでは、だめだ。」というとき、また切り替えたのです。そこにとどまっていると、どうしても行き詰まってしまう。「では、保育園で彼女はどのような仕事をしているんだ。」と考えます。朝、子どもたちを預かります。特にコアラちゃんとカンガルー君には、とっても好かれているのです。人工の袋を作り、中にコアラちゃんをしがみつかせます。ボール遊びをしているときも、縄跳びをしているときも一緒です。昼寝するときも一緒です。でも、親にはかえないません。動物園の勤務が終わって、親が迎えに来ると、子どもたちはあつけなく親元に帰ってしまいます。サクラさんは寂しいかなと思っていると、バルボンさんがやってきて、園の後片付けを手伝ってくれます。バスも一緒に乗り、つり革も一緒につかまり、バスを一緒に降ります。「あれあれ。」と思っていると、二人で

バルボンさんのお家に入って行きます。ここで、「二人はずっと一緒です。だって、バルボンさんとサクラさんは結婚したんですもの。」という文章が入ります。

式自体は描かないで、バルボンさんは結婚したんだということを了解してもらったのです。では、「結婚した後は、どうなったか。」ということになります。私は小学校の授業に呼ばれることがあって、この作品は乳幼児だけでなく、学齢が上でも楽しんでもくれるので、「さあ、次は？」と尋ねます。だいたい大人の方々は「次は赤ちゃんだね。」と言ってくれます。子どもは、「次は？」と聞くと「離婚。」と答えます。

— 『バルボンさんのおさんぽ』 — （読み聞かせをする）

ウ 『ももんちゃん』シリーズ

— 『どんどこももんちゃん』 — （読み聞かせをする）

童心社という出版社から「あかちゃん絵本を創らないか。」というお話の依頼がありました。童心社には、みなさんご存知の『いないいないばあ』というたくさんの乳幼児に読まれているまっぴにみよこさんの本があります。「その同じ層に向けて、私が絵本を創るのはちょっときついな。」と思い、少し視点をずらして「そんなことできるわけないスーパー赤ちゃん。」「そんなことするわけない自立した赤ちゃん。」というような発想でお話を創り始めたのです。最初に創ったのが『ももんちゃんどすこーい』という作品です。ももんちゃんがおすもうの四股を踏むと、地面が揺れ、地球の反対側の砂漠にいたサボテンさんの所までそれが伝わって地面が揺れて足が抜け、サボテンさんが地球を半周して、ももんちゃんの所に遊びに来る、という話です。赤ちゃん絵本にしてはややスケールの大きな話になり、赤ちゃん絵本としては難しいという意見が営業サイドからありました。でもそれは折り込み済みだったのです。「読み聞かせをする大人が楽しんでもくれればいいな。」というのが、一つあったのです。例えば赤ちゃんが8か月だとすると、その見た範囲で描くとなると、「これはバナナ。」とか「これはりんご。」とか「これはいぬ。」とか、「これはねこ。」というような認識絵本になります。認識絵本は、読んであげる、信頼できる大人から読み聞かせしてもらおう赤ちゃんにとっては心地よい時間なのでそれはそれでいいと思うのですが、読み聞かせする大人はそんなに作品自体をおもしろいとは思いません。私がさっき言った「ぐりとぐら」を娘に読み聞かせをしたときにさっぱりおもしろいと思えなかったのと同じように、それを年齢を下げて、赤ちゃん絵本で大人が読んでおもしろいか、というとそれはなかなかありえないことです。でも、その中で親に少しでも楽しんでもらえれば、またその読み手である乳幼児も、楽しんでもくれるのではないか、と思ったのです。サボテンとか、そのとき見たことのないものが出てきてもいいんじゃないか、という思いを伝えて、思いを込めて、『ももんちゃん どすこーい』と『どんどこ ももんちゃん』の2冊を出版してもらったのです。でもこれが16冊も続くとは、思ってもいませんでした。裏表紙には、よく読んであげるなら何歳何か月からとか、自分で読むなら何歳何か月とか、指針が書いてあります。これは、初めて読み聞かせをする親御さんにとって参考になるので決して無駄だとは私は思いません。でも最初出してもらったときは、何もうたわず、きれいな形で読者対象みたいな指示を出さないで、出版してもらったのです。実はこれを、中学2年生に読んでくださった先生がいらっしゃったんです。それで見ず知らずの私のところに版元をとおして、中学2年生に『どんどこ ももんちゃん』の本を読み聞かせをしてみたら、こんな感想がありましたということで、私のところに送ってきてくれたのです。ちょうど中学2年生に太宰治の『走れメロス』が載っています。感想文で多かったのは、

約束事で一生懸命走っていくメロスの姿と、この『どんどこももんちゃん』が一目散に駆けていく姿を重ね合わせた非常に哲学的な解釈の多い感想文でした。「そうか、作家の手を離れると作品は読者のものというのは、そういうことなんだな。そんなことは思いもよらないで書いていたのに、ある時期、ある時に、読み手にとっては、そういう形で読み取るんだな。」というふうに思いました。その中で、実は面白い感想文がありました。

2年1組Hさん。ずっと感想が書いてあって、最後の方に、「50代の人がこんな絵本を描いて家族が養えるなんて信じられない。とっても楽なお仕事だと思っちゃう。だけどこんな短い本を描くのも大変なのかな…。」と、書いてありました。

2年1組Sさん。「最初、なんでももんちゃんは急いでいるのかって思った。「どんどこどんどこどんどこどんどこ ももんちゃん急いでいます。」この言葉が頭から離れなくて、印象に残った。私が見た中で、こんなにくだらないものは初めて見た。だけど印象に残ったのは、本当です。こんなに短い文で、こんなに印象に残るのもすごいと思った。そして、この文を書いた人もすごい想像力のもち主だと思う。」まさか、先生が本人無断で著者のところへ送っているなんてつゆ知らずのはずなのに、最後、気遣いが見えるところがなんとも複雑な思いでした。

1組Kさん。「ももんちゃんは、桃なんですか。人なんですか。それとも肉まん？桃まんなんですか。私の心には今、疑問しかありません。」

1組Uくん。「そもそももんちゃんとは、何なのか。ももんちゃんは、頭が桃っぽいもの？そしてなぜか泣きながら、どこかへ走っていった。もう言いようのないほどわけがわからない。なぜ、泣いたのか。そしてなぜ、走っていたのか。まったくもって、わけのわからないやつだ。が、こういうやつが、地球上に存在するから楽しい。」

このように書いているのです。これらの感想を私は、いいなと思います。余裕というかユーモアを理解する気持ちというのが、今の子どもの方が、私たちの時代よりもよっぽど、育っている感じがします。私たちの時代はみんな、頭がちがちで、堅かったです。

2組Yくん。「『どんどこ ももんちゃん』の本は、小学校低学年の子に読んであげてください。うちには・・・。」

これで決まりです。

どうして生き延びているのか、私も分からないのですが、17巻目が『ももんちゃん し〜』という最新刊です。

— 『ももんちゃん し〜』 — (読み聞かせをする)

自立した赤ちゃんを創っているときに、「自立した食べ物はどうだろう。」と思いました。いろんな絵本作家さんがいて、食べ物が得意な作家というのは、確かに食べ物をおいしそうに描けるのです。料理が好きな作家さんは、やはりご本人も料理が好きで、食べることが好きな方が多いです。私は、そういうジャンルをやっている方はいらっしゃるので、手を出さない。例えば、しかけ絵本は、きむらゆういちさんにはかなわないからやりません。ねこを主人公にしたお話は、『ルドルフとイッパイアッテナ』の斉藤さんの作品が最高だなんて思っているのだから、やりません。どういうところが誰もやっていない範囲なのか考えました。ももんちゃんがああいう形で

自立した赤ちゃんということをやったので、自分がやっていないジャンルというのを考えたら、食べ物だったのです。そのうえ私は、食べ物が好きなんです。食べ物をやるのだったら、「私は素材だけで勝負だな。」ということで、最初に創ったのが『たまごさんがね・・・』『おにぎりくんがね・・・』です。おにぎりから手が出てくるのです。そして、おにぎり自身が自分を固めていって自分でのりを巻いて、具もちゃんと口の中に入れ、それでおにぎりになっていくという話です。そのシリーズが続いていて、第7巻まであります。今年の秋には、いちごを主人公にして創る予定です。一冊だけちょっと読んでみたいと思います。これが今説明した『たまごさんがね・・・』『おにぎりくんがね・・・』『なっとうさんがね・・・』それから『すいかくんがね・・・』『りんごくんがね・・・』『おいもさんがね・・・』で、秋に出しますけど次が『いちごさんがね・・・』になります。これらの話は人の手を借りず、最後人間に食べてもらうのを喜びとしています。では、『とうふさんがね・・・』を読みたいと思います。

エ 『とうふさんがね・・・』

— 『とうふさんがね・・・』— （読み聞かせをする）

これを2歳児くらいにやると、最後のオチが分からないのです。また、1歳くらいだと、「冷や奴を知らない。まだ見たことない。」ということです。でもそのことを、私は、怖がらなくてもいいと思っているのです。難しい言葉をあえて使う必要はありませんが、あまりにもかみくだいたり、子どもにあまりにもよりそったりというのも違うと思っています。いずれその子も、冷や奴を見ます。すると「あつ、絵本にあった冷や奴はこれだったんだ。」ということ気付くことがあってもいいだろう、と思うのです。ですから、日常使わない「たんたん、召し上がれ。」とか、「心配ご無用。」とかをキーワードにしています。それをキーワードに「そこまでお話をもっていくか。」「それと最後のオチをどうするか。」を考えて、私はずっと創り続けているのです。そこで私は、やはり最初に戻るのです。『ぐりとぐら』のカステラに私の娘が手を出して食べそうになった時、「おい、こんな絵にだまされちゃいかんぞ。」って思った私です。でも、読み聞かせをしている時、すいかなんかやると、本当に立ち上がってきて、手で食べる子がいるのです。「だまされるんじゃないよ。」って言ってた本人ですが、その子がかわいくてね。抱きしめたいくらいの可愛い子で、本当にこうやって手を出して食べるマネをするのです。そうすると、私は、最後のページは、本当においしそうに描かなきゃいけない、と思うのです。『いちごさんがね・・・』が出版されたら、最後はケーキの絵を出していますので、「私が言っていたことはこれなんだな。」と気付いていただけると、うれしいな、と思います。

『とうふさんがね・・・』を創る時のヒントになったお話を一つしたいと思います。「おっちゃん、おっちゃん、どこ行くの。」という言葉があるんですが、その言葉が出たことによって、このお話が広がったのです。実は、納豆を創ったものですから、次は「とうふ」というテーマで創ろうと思い、頭に「とうふ、とうふ」ばかり考えて、「どういいう話を創るか。」と考えていたんです。どうしても、豆腐一つではいけないので、包丁と豆腐がつながって出てきて、行き詰まったのです。

日曜日、「おっちゃん、遊ぼう。」と言って近所の子どもが私の家に遊びに来てくれます。10年前から適当にやっている遊びなんですけど、今、公園で三角ベース野球をやっています。遊びですので、人数は不特定、誘いに来たらやるという感じです。普段着のまま、けがしないように、柔らか軟式ボールとカラーバットを使っています。グローブは各自持参します。この公園というのが丘陵地につくってあり、野球場ではなくその空き地で遊んでいるのですが、私たちが

遊んでいるときに、じっとみている子がいたのです。そういう子は「遊びたい。」「一緒に混ぜてほしい。」と思っていると思うのです。そこで、私が声をかけて「一緒に野球をやる。」と聞くと、その子は「うん。」と言って仲間に入ってきました。その子に初めて会ったので、名前を聞いたのです。それで「〇〇くんが仲間に入ったよ。」と今やっている子どもたちに紹介したのです。子どもたちは、ゲームをやっている最中ですから、私が〇〇くん「あれが3年の△△くんね、6年□□くんね。」と、教えてあげました。当然、最後に私が自分の名前を言わなければなりません。「とよかずひこです。」と、言いました。その時、55歳だったのですが、55歳と言えなくて、「6年です。」と言ったのです。当然、一緒に遊んでいる彼らにも聞こえているわけなので、「嘘だよ。」とか「また、ばか言って。」みたいなことを言ってくればよかったのですが、その遊んでいる子たちがその時何の反応もしなかったのです。〇〇くんも、一瞬私の顔をみて訝しげな顔をしましたが……。私は日曜日の午後やっているものですから、夕方最後まで残ってやるのです。子どもは、忘れ物が多いので、子どもが帰った後、それを見届けるために、最後まで残るのです。その〇〇くんは、初めて入った日、途中で「帰る。」と言ってきました。すると「明日、学校終わったら遊べる？」と聞いてきたのです。一瞬、「何を言ってるんだろう。」と思い、頭がくらくらしました。私のことを本当に6年生と思っていたのです。別に若作りとか、そのようなレベルではありません。私は小学校1年生の時、6年生が親父に見えました。すごく年上に見えました。だから、別に深い意味がなくて、こんな思い込みはあり得るなと思いました。だから、「明日、学校終わったら遊べる？」と聞いたのです。「明日、月曜日だろ。」という気持ちで聞いたのです。でも、月曜日私だって仕事があります。その時に、「明日仕事あるんだ。」と言うのもしかたに障って、なんて答えたと思いますか。実は、「明日、塾なんだ。」と言ったんです。まあ言えば、その場のがれです。6年生が塾に行くのは不自然ではないので、「塾なんだ。」と断るように決めたのです。その子は次の週も、遊びに来ました。その時初めて、「私のこと、6年だと思った。」と聞いたら、「思った。」と答えました。だから、そういうことなのです。だから「おじさん、いくつに見える。」とか、「おばさん、いくつに見える。」とか「わたし、お姉ちゃんよ。」とか言っても、たいした根拠は無いのです。若く言っても、彼らの答えには、何の根拠もないってということなのです。だから、何と言われてもそのくらいだと聞き流していればいいのです。

私はいつも時間をずらして仕事に行くのですが、たまたま何かの拍子で登校時間と一緒になったのです。すると、いつも公園で遊んでいる子と出会ってしまいました。すると、その子が目をまん丸にして私のことを指さして、「おっちゃん、どこ行くの。」と聞いてきたのです。いつも緑山公園で遊んでいる姿しか知らないおじさんが、なぜここにいるんだっていう顔をして、「おっちゃん、どこ行くの。」と尋ねてきたのです。この「おっちゃん、おっちゃん、どこ行くの。」という言葉の一つ、ぱっとつかんだことによってこのお話の道筋はあつという間にひらけたのです。計算づくで入ったわけではなく、ただアンテナだけは張っていたということです。ここの「仕事としての絵本創り」に結びつくと思うのですが、情報をただ待っているだけでなく、やはりどこかでアンテナを常に張っていることが大切なのです。それがタイミング良く「おっちゃんどこ行くの。」というのを聞いた時、私自身行き詰まって迷っている最中でだったので、「初めからカット割りした子どもを出せばいいんだ。」とひらめいたのです。前提は、「初めから小さい子どもが出てくればいいんだ。初めから、公園で遊んでいる子どもを小さなカット割りにしたら、何の問題もない。」ということで、瞬時にこのお話はできたのです。

(4) 最後に

では、最後に今晚お風呂に入っていい夢をみていただきたいと思いますので、お風呂の作品を紹介したいと思います。これはお風呂が移動して歩くお話です。それで、動物たちを入れることを喜びにしている、風呂代も取らずに、ひたすら山に行って、海に行って、それから町に行って、空に行って、そして森に行ってお風呂に入ってもらうのです。「実はこのお父さん風呂には子どもがいた。」父と子で、お話を創りました。では、これがお風呂屋さんの最新刊です。

— 『どうぶつえんのおふろ屋さん』 とよたかずひこ — (読み聞かせをする)

予定していた読み聞かせが全部できました。どうなるかと少し心配していたのですが、みなさん聞いてくださり、ありがとうございました。

私は子どもとやっているときは、いつも床座りにして、子どもたちとのやりとりを楽しみながら、やらせてもらっています。いろんな反応をしてくれますので、おもしろいです。子どもそのものは集中力がないから子どもであり、エネルギーがあるから子どもなのです。「聞いていないから。」なんて心配される方もいますが、その中には聞いている子もいますから、その子に向けて語ればいいのであり、あまりそれに惑わされないでやられるといいと思います。そこで非常に心配される方がいらっしゃると思いますが、全然問題ないと思うのです。私の時だって、うろうろする子がいます。それを読み手が気にしてしまうと、子どもも気にします。初めて読み聞かせ会に来てくれる子もいるわけです。

3月11日(東日本大震災)以後、本当に生きづらい世の中です。曲がり角といっても、もう10何年来ずっと世界中曲がり角ばかりなので、今更改めて言うことはないけれども、「生きていればものすごく楽しい事がいっぱいあるんだよ。」ということを力づくでも伝えていかなければならない状況になっています。ここにおいでくださっている方々もそういう意味で、子どもたちと通い合い、「生きていれば本当に楽しい事、結構あるんだよ。」と伝えていっていただきたいと思います。私も皆さんと同じ隊列に入って、それが作品創りで、そのような形でお役にたてれば、と思っています。皆さんが、「今後とも本を伝えるということ」「手渡ししていただけるということ」で、私の方からもうどうかよろしく願いしたいと思います。私の話はこれでおしまいいたします。ありがとうございました。

